

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：32615

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23087

研究課題名（和文）日本人英語教員のトランスリンガルアイデンティティの確立過程と教育的意義について

研究課題名（英文）The pedagogical significance in development and deployment process of translingual identity of Japanese English teachers

研究代表者

水倉 亮（Mizukura, Ryo）

国際基督教大学・教養学部・特任講師

研究者番号：90848847

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、国際化が急速に進む地方都市で、日本人英語教師のトランスリンガルアイデンティティとその教育的意義を明らかにすることを目的とした。研究対象とした地方都市では、ある国際的な大学が設立されたことで都市環境が急速に多言語多文化化した。複数言語を柔軟に使用できる当該大学の卒業生たちへのインタビューを通じて、英語教師になった彼らが、英語を母語としない留学生との交流に際して、言語の正確性よりも意思疎通を重視していたことが分かった。また、彼らは複数の言語を使いながら複雑なコミュニケーションに対処する実践的な能力を教えたいが、教科書の内容を忠実に教える必要性とのジレンマを感じていたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、母語話者の言語能力を基準とした既存のバイリンガリズムの理論的枠組みを現代社会の現状に合わせて解釈し直した点にある。国際的には複数言語主義やトランスリンガリズムなど、より雑種かつ流動的な人々の言語使用を認識するための議論が活発に行われているが、国内ではまだ十分になされていない。さらには、国内の「グローバル化」や「国際化」の認識は英語圏の言語や文化に結びつくことが多く、国内で身近にいる外国から来た人々をうまく取り込めていない。複数言語を使用でき、より国内の国際化の実態に合わせて英語を指導できる教員の事例を明らかにすることは、今後の外国語教育や国際化政策に有意義である。

研究成果の概要（英文）：This study employed qualitative data analysis with the aim of illuminating the development of translingual identity among Japanese English teachers and its educational significance in one of the local cities which experienced rapid multilingualization due to the establishment of international university a few years ago. This university's graduates who became English teachers and were proficient in multiple languages placed greater emphasis on effective communication rather than grammatical accuracy because most international students are from non-English-speaking countries. They desired to teach students practical skills in dealing with complex international communication by using multiple languages. However, they also felt struggled due to the restrictions of the standard of school education, which required them to teach correct English based on textbook contents.

研究分野：社会言語学、応用言語学、英語教育学

キーワード：英語教育 教師教育 トランスリンガリズム アイデンティティ 言語教育政策 言語イデオロギー

1. 研究開始当初の背景

グローバル化の進展とともに英語の使用の目的は多様化し、言語使用者の母語が英語であるかどうかに関わらず、さまざまな場面で国際的なコミュニケーションの手段として使用されている。こうした母語話者を前提としない国際的な英語によるコミュニケーションは、既存のバイリンガリズム(Bilingualism)を中心とした理論的枠組みを用いての社会文化的言語行動の解釈を困難にさせてきた。Bloomfield (1933)のバイリンガリズムの定義によれば、二種類もしくはそれ以上の言語を母語話者と同様に使用する能力のことを指し、言語使用は母語話者の言語能力を基準としたモノリンガルの規範を前提とした共通の均質的な言語学的情報のやり取りとして説明されている。

しかし、ポストモダニズム社会における言語使用の本質は、雑種性や流動性を持ち合わせている。言語使用者が持つ意思疎通を図るための言語リソースは必ずしも母語話者と同様の流暢さがなくとも使用することができ、さらには読む、聞く、書く、話すのそれぞれの能力について同じ能力を有しているとも限らない。Canagaraja (2012)はこれをトランスリンガリズム(Translingualism)と定義し、言語能力は母語話者と同等に扱わないことや、コミュニケーションが単一言語の範囲内で行われず、コミュニケーションをとる人物が利用可能な多様な言語リソースを方略的に活用し、対話者と意思疎通を図ることだとされている。

しかし、一般的に英語や外国語を用いた国際コミュニケーションの中での言語使用は、Bloomfield のバイリンガリズムの考え方を元に認識されている可能性が高いと考えられる。例えば、日本の義務教育過程においては、英語以外の外国語を科目として履修することが難しいだけでなく、外国語指導助手の出身地についても、徐々に変化してきてはいるものの英語圏の出身者が依然として多い。「グローバル」「国際」「外国」などはすぐにそうした英語圏の国や文化、そこに住む人たちを想定する場合が多く(久保田, 2018) 学校内において多言語多文化社会における複雑な言語コミュニケーションの実態に触れることも困難である。英語についても、非母語話者同士での英語の使用について十分に想定された教育が行われていないことが想定される。こうしたバイリンガリズムを想定した単一言語のみを規範として扱う枠組みが、社会的価値観として社会に作用し、言語イデオロギーとして人々の英語教育に対する価値観に影響を与えている可能性がある。

2. 研究の目的

1で述べたように、より社会の多言語多文化化が流動的に起こっている現状に即して外国語としての英語を指導するためには、現状 ALT だけではなく日本人英語教員にも重要な役割がある。したがって、英語だけではなくそれ以外の言語や文化に見識のある日本人英語教員とはどのような教員であるのか、彼らは複数言語をどのように学習し、それを実際のコミュニケーションの中で使っているのか、またその経験を英語教育の中で応用するのかをトランスリンガリズムの枠組みの中で明らかにすることは重要である。

また、日本社会における「グローバル」「国際」などについての認識は狭義的であり、単一言語主義的である。ネイティブスピーカーを基準とした言語能力の認識やバイリンガリズムの枠組みが言語イデオロギーとして働き、トランスリンガルな言語使用を制限する可能性もあると考えられる。したがって本研究では、日本人英語教員のトランスリンガルアイデンティティの確立過程およびその教育的有用性、さらにはその阻害要因を明らかにすることを目的として設定

した。

3. 研究の方法

3.1 研究実施場所について

2で述べた目的に合わせて研究を進めるため、データを収集するために適した場所を設定した。プライバシーの保護の観点から必要最低限の情報をここに記載するが、データ収集を行なった場所は、留学生を多く要する大学を持つ地方都市で、この都市に住む市民は日頃からたくさん外国からの留学生やその大学で働く教職員と日常的に交流する機会がある。この大学で学ぶ留学生の多くは、英語は母語ではないものの流暢に話すことができ、日本人学生はその留学生たちの出身国の言語や文化も学びながら主に英語と日本語を使って勉強をしている。そしてこの大学に通う日本人学生は希望すれば英語の教職科目を履修すると教員免許を取得することができ、卒業後英語の教員として働いている人もいる。本研究では、トランスリンガルに言語を学習し使用したことのある日本人英語教員を対象としインタビュー調査を進めるため、この地方都市を研究実施場所として設定した。

3.2 データ収集分析のデザインについて

本研究では主に4つの研究設問について答える必要があった。

- 1) この地方都市ではどのように多言語多文化化が進み、それが国際コミュニケーションや英語教育に対する社会的価値観の形成にどう影響を与えているのか。
- 2) この地方都市で勉強し英語の教師になった学生は、4年間を通してどのようにトランスリンガルなアイデンティティを形成したのか。
- 3) 英語の教員になった卒業生は、そのトランスリンガルなアイデンティティを英語教育の中でどのように生かしているのか。
- 4) トランスリンガルなアイデンティティを教育の中で生かすにあたり、阻害するような要因はあるのか。

まず、研究設問1に答えるために、本研究の主要な対象である英語教員の他にこの都市の多言語多文化化のプロセスをよく知る方にインタビューをする必要があった。したがって、この都市で教育委員会に所属し教育行政に従事する方3名にインタビューを行った。そのうち2名は元中学校の英語教師で英語教育についての知識を持ち合わせている方々である。この3名には、主に1)この国際的な大学ができる前と後でどのような変化があったのか、2)都市の多言語多文化化が学校の英語教育にどのような影響を与えているのかの2点についてインタビューで質問をした。

また、大学で行われている英語教育が学校教育に影響がある可能性も考えられたため、大学の英語プログラムに所属する英語教員にもインタビューを実施した。大学の英語教員については合計10名にインタビューをし、そのうち6名は英語のネイティブスピーカーの教員、残りの4名については日本人の英語教員である。インタビューでは、主に中学校や高校の英語教員に対して大学に入る前にどのような英語教育をしてほしいと考えているのか、日本の学校の英語教育についてどのように考えているのか、そしてALTとしてこの都市で働いた経験のあるネイティブスピーカーの教員にはその経験についても質問した。

さらには、留学生がこの都市での経験についてどのように感じているのかについてもインタビューすることで、より客観的にこの都市の多言語多文化化について理解することができると考

えたため、4名の留学生で日本人に英語学習をサポートする役割を担っていた卒業生にも話を聞いた。

研究設問2に答えるために、この国際的な大学の卒業生約12名にインタビューを行なった。12名の学生は、主に3つのグループに分けることができる。1つ目のグループは、英語以外の言語を学習使用した経験があり、英語の教職課程を経て英語の教員として働いている卒業生である。2つ目のグループは、英語以外の言語を学習使用した経験があり、英語の教職課程を履修したが、その後英語の教員にはならなかった卒業生である。最後の3グループ目は、英語以外の言語を学習し流暢に使用することができるが、英語の教職課程は履修しなかった学生である。それぞれグループ毎に4名ずつインタビューをした。研究設問2に答えることを目的としたインタビューでは、特にこの大学での4年間のトランスリンガルな経験について質問をした。どうして英語以外の言語を履修したのか、学習するにあたって困難だった点は何か、英語以外に言語があることによって良かった経験、もしくは逆に良くなかった経験等について質問した。

研究設問3、4に答えるために、上記の3つのグループのうち教職課程を履修し、最終的に英語教員として働いている卒業生に対してインタビューで質問をした。質問内容は、現在行なっている英語教育の中で、大学での国際的な経験をどのように生かしているのか、学生たちにどのような英語力を身につけさせたいのかについてである。また、大学4年間を通して経験した、言語学習や国際的な経験を学校の英語教育で活かしたいけれども、それがうまくいかない事例についても質問した。

どのインタビューについても、実施時間は約1時間と設定して行なった。使用言語は研究実施者が理解できる言語であれば話しやすい言語を選択できるようにし、ネイティブスピーカーの教員と留学生については英語で実施し、その他の日本人については日本語でインタビューを実施した。本研究実施途中で新型コロナウイルス感染症が急速に広がり、現地に赴いて直接対面でインタビューをすることが難しくなった。そのため、2020年度から2021年度まではオンライン会議システムをうまく活用しながらインタビューを実施した。インタビューは同意を得た上で録音をし、全て文字起こしをした。文字起こしをしたデータについてはコード化しテーマ分析を行なった。

4. 研究成果

本研究は質的研究のため、グラフや表で示すことが難しい。そのためデータを含めて説明できないため、4.1から4.3にそれぞれ主な研究結果を示す。

4.1 都市の多言語多文化化と国際コミュニケーションに対する市民の価値観の変化について

研究対象都市は元々国際観光都市であり、主に東アジアの国からの観光客を受け入れてきた歴史がある。そのため、日常生活で外国人を目にすることは慣れてきた。しかし国際的な大学が設立されたことをきっかけに、留学生や外国人の教職員が観光ではなく、居住するようになり、共に暮らすという意識が市民の中に生まれた。例えば、アルバイトをしている留学生とコンビニエンスストアで会話をしたり、地域の防災活動に留学生が参加して互いに地域の安全について議論をしたり、観光客ではなかった言語使用が生まれるようになった。観光客の接客やおもてなしを目的とした国際コミュニケーションが、より日常生活に関係するものになったことで、より文化の違いや外国語、特に英語の役割についての価値観が変化していった。

この価値観の変化は教育現場にも影響を与えた。例えば、この大学の教職員の子供が学校に通うようになり、両親あるいは父親か母親が外国人であるという生徒の数が増加した。日常生活を通して異文化を理解しなければならない環境が生まれるようになり、例えば給食で豚肉が宗教

的な理由から食べられない子供がいた時にそれはなぜかを考えさせたり、意図して外国の文化を紹介する機会等を作らなくとも、日常生活の一場面として国際理解教育をすることができるようになった。それに伴って、1で指摘したような「グローバル」「国際」という概念が必ずしも英語圏を中心とした国や文化に繋がらなくなり、英語についてもネイティブスピーカーを基準とした英語の習得を目指すのではなく、実際に日常生活でどのようにコミュニケーションを外国人と取るべきかへ意識がシフトしつつあることがインタビューデータの分析から推察された。

4.2 学生のトランスリンガルな外国語の使用と言語イデオロギーの影響について

大学での留学生と日本人学生との国際コミュニケーションも、4.1で触れたような都市の状況と類似する部分が多い。特に2で指摘したように、留学生は英語を母語としない学生が多いため、ネイティブのように文法的に正しい英語を使おうという意識よりも、如何にして意思疎通を図るかと考えていた卒業生が多くいた。

また、国際寮で留学生と共に生活をした経験を持つ卒業生は、親しかった留学生の出身地の言語を学んでいた。韓国語、インドネシア語、中国語、スペイン語とそれぞれ高いレベルまで習得している学生も多くいた。留学生と日本人学生とのコミュニケーションは、それぞれ言語のレベルが異なるため、複数言語を補足的に使いながら意思疎通を図るケースも多くなってきた。例えば、韓国語を高いレベルで使用できる学生は、英語と日本語と韓国語をうまく織り交ぜながらコミュニケーションを行っていた。

学生によっては、英語よりもこれらの言語に興味を持っていたため多くの学習時間を確保したいと考えていたが、必修の英語科目を多く履修しなければならなかったり、留学の際に韓国に行くにもかかわらず英語のテストのスコアの提出を求められたりと、英語を中心とした単一言語主義的なシステムの制限を受けて苦労した経験をインタビューで話した卒業生もいた。

4.3 英語教員が持つ国際経験とそこから生まれる英語教育で実施したい希望や願望について

4.2で触れたような国際コミュニケーションの経験がよりトランスリンガルな言語使用者としてのアイデンティティ構築に影響を与えており、それを英語教育の中でうまく活用したいと考える卒業生が多くいた。したがって本研究では、アイデンティティの中でも英語教育において実現したいと思う感情、すなわち願望 (Desire) に焦点を当てて分析をした。

インタビューに参加した英語教員になった卒業生たちの多くは、インタビューでの会話の中で文法的な間違いがあったり、発音が拙かったりしても最終的に意思疎通を図ることができる能力が重要であると考えていた。したがって、ネイティブスピーカーのように英語を流暢に話すことや文法的に正しい英語を指導するのではなく、生徒たちが自身が大学で経験したような場面に遭遇した際に、それをうまく対処できる能力を身につけられるようにしてあげたいと話していた。しかし、学校教育では定期テストや入試で採点する必要があり、「教科書の中で正しいとされる英語」を教える必要があるため、非常に難しいと考えていた。

参考文献

久保田 竜子 (2018). 『英語教育幻想』ちくま新書.

Bloomfield, L (1933). *Language*. Holt, Rinehard and Winston.

Canagarajah, S. (2012). *Translingual practice: Global Englishes and cosmopolitan relations*. Routledge.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 水倉 亮, 陣野 俊彦	4. 巻 14
2. 論文標題 日本人英語教員の役割とポストコロナ社会の国際コミュニケーション教育	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 明治大学教育会紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 水倉 亮	4. 巻 12
2. 論文標題 日本人英語教員が非母語話者として英語を教えることとは	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明治大学教育会紀要	6. 最初と最後の頁 35-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 水倉 亮
2. 発表標題 日本人の英語の先生としてできること： ポストコロナ社会に求められる国際コミュニケーション教育
3. 学会等名 明治大学教育会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 水倉 亮
2. 発表標題 日本人英語教員が非母語話者として英語を教えることとは
3. 学会等名 明治大学教育会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tetsushi Ohara, Ryo Mizukura
2. 発表標題 Articulating the Role of the Self-Access Learning Center in a Translingual Environment
3. 学会等名 The Japan Association for Self-Access Learning
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryo Mizukura, Enric Llurda, Julia Calvet-Terre'
2. 発表標題 Language teachers' identity: Exploring the conflict between nativespeakerism and translingualism
3. 学会等名 IAM L3 CONFERENCE ZAGREB 2022 The 12th International Conference on Third Language Acquisition and Multilingualism (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ryo Mizukura, Enric Llurda
2. 発表標題 English teaching goals by multilingual native and non-native teachers of English in Japan.
3. 学会等名 13th International Conference of English as a Lingua Franca (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------